

## 失われた母との出会い

——エレヌ・シクスー『ドラの肖像』における「母-子」の融合関係をめぐって——

津田 久美子\*

### La rencontre de la mère perdue

autour de la fusion de la mère et l'enfant dans *le Portrait de Dora* d'Hélène Cixous

TSUDA Kumiko

#### abstract

Il est frappant de constater que la mère de Dora figure dans les rêves de celle-ci. Bien qu'ayant étudié en profondeur les rêves de Dora dans « Fragment d'une analyse d'hystérie (*Le Cas Dora*) », Sigmund Freud a interrompu le traitement sans éclairer le sens de cette apparition de la figure maternelle. Il est possible d'affirmer en outre, par rapport à ce fait, que l'interprétation de la relation intime entre Dora et Madame K a échoué.

*Portrait de Dora* d'Hélène Cixous est une pièce de théâtre qui réinterprète, de manière critique et sous un aspect féministe, la relation de Dora et Madame K. Dans cette pièce Dora montre évidemment une adoration pour Madame K, mais pousse celle-ci jusqu'à vouloir écouter sans cesse sa voix et fusionner avec elle. Son amour pour Madame K. évolue et se transforme au cours de la pièce, pour atteindre une dimension spirituelle voire mystique. À un certain point Dora s'adresse ainsi à un « vous », personnage abstrait sans nom, comme si elle se trouvait projeté dans l'utérus maternel.

On pourrait dire ainsi qu'au travers de sa pièce Cixous élabore un modèle de relation fusionnelle dans lequel Dora rencontre la mère perdue.

Mots clés : *Portrait de Dora*, Hélène Cixous, *Le Cas Dora*, hystérie, critique féministe

#### 序

Dora とは Sigmund Freud の症例研究『あるヒステリー患者の分析の断片』<sup>(1)</sup> に登場する女性患者の仮名である。この女性ドラの症例研究をめぐってフェミニズム的解釈による読み直しの作業が多く行われている。この女性がなぜ現在、特にフェミニズム研究の文脈でとり上げられ、論じられているのだろうか。それはこの症例研究が女のヒステリーについて、女の欲望やセクシュアリティを具体的にとり上げている代表的な考察だからである。さらに言えば、フロイト精神分析とフェミニズムの交点上に位置する考察だからであろう。ドラは今日のフェミニズムにとってのある象徴、ヒロインとなっていると言ってよい。

批評的な読み直しの中でも、Hélène Cixous による戯曲 *Portrait de Dora*<sup>(2)</sup> はフロイトによる症例研究を「フィク

---

キーワード: 『ドラの肖像』、エレヌ・シクスー、症例ドラ、ヒステリー

\*平成 15 年度生 比較社会文化学専攻

ションとして読」み、シクサーの批判的視点から書き換えられた作品であり、もうひとつの「ドラ」像を提示しているものである。この作品はフロイトの『症例』のテキストに限りなく近づきながら構成されているにもかかわらず、まったく別様態の劇作品となっている。緻密に元のテキスト（『症例』）をなぞっているかのように見えて、その実まったく異なるテキストに再編成されているのである。これには「転覆的な模倣」というすり替えの技法が駆使されている。

『ドラの肖像』ははじめ、ラジオドラマの為に書かれたものである。断片的なセリフ回しが特徴の作品であるのだが、語りの焦点がドラにあるため、このヒロインのセリフの分断が際立つ作品となっている。ドラの過去の記憶と夢と幻想が錯綜し、ひとつに収斂されていかない、まるでカレイドスコープさながらの多面体で構成されている作品である。

本論は Janette Laillou Savona と Gayatri Chakravorty Spivak の論考<sup>(3)</sup> に依拠しつつ、シクサーの『肖像』の今日的な読解を目指すものである。1) まずフロイトの『症例』をテキスト作品として読み、フロイトが見逃したドラとドラの母との関係に注目する。2) 次に、フロイト症例でもシクサー作品においても見られるドラの K 夫人への憧憬が、フロイトの言うような単なる「リビドーの代理」ではなく、より多面的な様相を示すものであることを確認しておく。それから 3) 『肖像』においてドラが K 夫人に対して抱いてきた親密な愛情がどのように描かれているのか、『症例』ではあらわれなかった「母」とはどう出会ったのか、という観点よりドラの K 夫人との関係を分析していく。4) その親密な関係性は、「母／子」の融合関係というひとつの倫理的モデルを提示しているのではないか、というのがここで目指す読み方である。本論では、「母」という言葉は単に実際のドラの母親や誰かの母親といった具体的な母親を指すだけでなく、より抽象的な「母親なるもの」という意味でも使われる。

## I . 失われた母

この『症例』には「女のエディプス・コンプレックスとその反転との二様態が明確にされている」と Irigaray は言う。「父への欲望、母への憎悪と、母への欲望、父への憎悪」があると言う<sup>(4)</sup>。

一方で『症例』においてフロイトは、ドラの母親についてはほとんど言及していない。言及しているとしても、ドラの父親やドラから聞き知った情報のみで十分検討することもなく、ドラの母親の人物像をつくりあげているのである<sup>(5)</sup>。ドラの完全失声というヒステリーの症状を分析する際、家族との関係を重視しているはずのフロイトが、父親については自己同一視しているともとらえられかねないほど詳細に言及しているにもかかわらず、母親に対してはドラやドラの父親と同じ位置から視線を投げかけているのである。

実際、ドラの症例について、フロイトがドラと母親との関係を無視にも近い形で見過ごしているということは、フェミニスト批評ではよく批判されることである。ドラのヒステリーを解明するためには父親との関係を検討するだけではなく、母親との関係も詳細に追求すべきではなかったのか。ドラの母親が家政に集中し、家中の家具や什器類に対して強迫的なほど清潔であることに固執する「主婦精神病」であること、女である娘のドラに、自分と同じように家の中のきりもりを強制しようとしたこと（これが後にドラとの関係を悪化させることになるのだが）をフロイトは彼女の無教養のせいにする。しかし、この母親が清潔さに固執しドラに家政を強要しようとすることは、単に彼女が無教養であるのではなく、彼女が自分も受けた同じ抑圧を繰り返していることに無自覚なだけではないのか。教養があればこの抑圧を分析、解明できるのだろうか。そうだとしたらなぜフロイトはこの母親の、そして主婦を含めた女に対しての抑圧に気づかなかったのか、あるいは無視したのか。

フロイトはこの『症例』の他の箇所でも「無教養な」看護師や介護者について差別的な発言をしている<sup>(6)</sup>。

これはフロイトへの批判としてよくあげられることではあるが、フロイトにとっての「無知への恐怖」が論文の中に漏れ出ている箇所とも言えるだろう。フロイトのこの「無知への恐怖」が女性嫌悪という形をおびてドラの母親や補助的役割の労働従事者に割り振られているように見える。

『症例』では、ドラは母親との同一化を拒んだとフロイトに解釈されるにもかかわらず、ドラの夢のなかには母親があらわれる。「いったいどうしてママがこの夢に出てきたのか分かりません。だってママはそのとき L にはいなかったのですもの」とドラは言う。この発言に対しフロイトは注をつけている。「普段はよく知っているはずの夢解釈の規則を彼女が全く誤解していることをしめすこの所見、および宝石箱に対する彼女の着想がため

らいがちで乏しいことは、非常に強く抑圧されている材料がここで問題になっていることを私に証明した<sup>(7)</sup>。つまりこの発言はドラの他の抑圧からくる健忘、意図的な物忘れを隠すために用いられたというのである。そしてその直後、フロイトはドラのヒステリーの元凶とみている K 氏への欲望の抑圧解明に乗り出すため、話題を宝石箱へと移す。

だが、果たしてほんとうにフロイトの言うようにすべてがドラの K 氏への欲望を抑圧することからくるものであると判断できるのであろうか。なぜドラとドラの母親との関係をとらえることがなかったのであろうか。ここにフロイトの、ドラの母親への意図的な無視が見てとられるのである。

このことから、『症例』で母への憎悪として描かれていたものは、フロイト自身の先入観、「無知への恐怖」からくる女性嫌悪であり、本来のドラ自身のものではないとすることができる。ドラの、母親への憎悪はフロイトによってつくられたものであり、ドラは母親を憎んでいたのではなく、忘れていた、失っていたのではないかと、言うこともできる。それは家父長制的な価値基準から「失わされてきた」と言ってもいいだろう。

## II. K 夫人への憧憬

フロイトの『症例』でもシクスーの『肖像』においても、ドラは K 夫人に対して惜しめない賞賛をおくる<sup>(8)</sup>。K 夫人が自分の父と愛人関係にあることを知っても、K 夫人がドラは性的なことには興味を示さないと夫の K 氏に中傷したことで K 氏から不名誉なことばでなじられることになっても、ドラは夫人を咎めようとはしなかった。K 夫人はドラの父との関係を良好にするためにドラを利用した。K 夫人のドラへの数々の親切は、ドラの父親の心証をよくするためであった。『症例』では、父親がドラに真珠の贈り物をしたとき、それが K 夫人の差しがねによるものであったことにすでにドラは気づいていた。ドラが夫人の家で見てねだった宝石の贈り物が送られてきたときにも、それが夫人の配慮によるものであることを彼女は理解していた。同じように父親が目当てで彼女に親切にしていたドラの家庭教師に対しては、それとわかると即刻解雇してしまったにもかかわらず。また、ドラの代わりに父親と B に滞在した従姉妹に対しては、それ以来疎遠になったにもかかわらず。夫人の差しがねに対してドラは、ただ悲しそうに現状を受け入れるのみであったのである。それに対し K 夫人は、ドラが K 氏の求婚について騒動を起こした際、ドラの父親との関係がはっきりしそうになるとドラを裏切った。ドラを性的な妄想にとりつかれた愚かな娘として犠牲にすることでドラの父親との恋愛関係を守ろうとしたのである。

こうした数々の裏切りにもかかわらず、ドラは夫人を慕いつづける。このねじれた愛情はどこから来ているのか。フロイトはこのドラの K 夫人への「同性愛的な」愛情を見落としたことがドラのヒステリー治療に失敗した一因であると認めている<sup>(9)</sup>。ドラが父親に対して異性愛的な感情を抱くことによる嫉妬から神経症の咳をしていただけでなく、K 夫人に対しての「同性愛」からくる嫉妬も抱いていたことでこの父と K 夫人の性愛関係に固執していた、と言うのである。ここではもはや、K 夫人はドラにとって父親と対称的な位置にある「母」の場所に立っていることになる。ドラは父親の K 夫人との不倫関係を敏感に嗅ぎつけ、いくつもの狂言まがいの騒動を起こし、父親の妻、つまり自分の母親に身を置き換えている行動をとっている。そして、フロイトの推測のようにドラの咳が父親と K 夫人との性愛を想像したことによるものであるならば、ドラは自分を K 夫人と同一視し、K 夫人の位置に立つことにもなる。「父にかつて愛されていた女、現在愛されている女のふたりともに自己と同一視していた」とフロイトは言う<sup>(10)</sup>。ただしフロイトが言うのは「父を愛する娘」として、である。それとは反対にフロイトが見落としたのは、嫉妬するほどに K 夫人を慕うドラ、「母を愛する娘」としてのドラである。ドラは自分の母親とも、K 夫人とも入れ替わり、それと同時に K 夫人に対しても「愛する者」となる。フロイトはこう言う。

ヒステリーの婦人または少女が、男性に向けられるべき性リビドーを精力的に抑圧しつづけると、ほとんど規則的といってよいほど、女性に向けられるリビドーが代理作用により強化され、ある程度まで意識化されるのを見るのである。<sup>(11)</sup>

ここでフロイトにとって性リビドーは異性に対して向けられるべきものと見なされているのだが、ドラが K 夫人

に抱いているのは、そのような代理作用としての「同性愛的」欲望だという説明で果たして十分なものなのだろうか。そうではないだろう。事実、この後フロイト自身の記述にも、この件に関しては説明に一貫性がなくなってくる。K夫人から結婚生活の困難を打ち明けられ、K氏の悪事を聞いていたにもかかわらず、ドラはなぜK氏を愛していたのだろうか、という「謎」についても「おそらく無意識のなかでは、種々の思考がとりわけやすやすと共存し、ときには相対立する思考でさえ争うことなく両立するという——このことは意識の上ですら、よく見受けるところであるが——このことに思っていたらば解決しうるであろう」<sup>(12)</sup>と述べている。

もし「無意識のなかでは」さまざまな思考が「やすやすと共存」し、「相対立する思考でさえ争うことなく両立しうる」のであるならば、なぜ性リビドーが異性に向かっているべきものであると言えるのか。無意識において矛盾が両立しうるのならば、なぜ欲望は異性にのみ向けられなければならないのか。このことから、次のような疑問が生じる。(ヒステリーの)女性 は自分の性リビドーを異性か同性かのどちらかに切り替えられるものなのか、それとも異性/同性の区別なく両立するものなのか。それはこの後見ていくように、後者である。

### Ⅲ. K夫人への親密な愛情

『肖像』におけるドラのK夫人への思慕は、融合と分離のあいだをたゆたうような形で表現されている。一方ではそれは「女のエロティシズム」とでも言うべきドラのK夫人との融合への欲望であり、他方では決して自分の手には届かない場所にいる憧憬の的としての、聖母に接するかのようなK夫人への崇拜の念となっている。また、自分を聖母=K夫人に同一化すること、K夫人との「異性愛」を模した親密な愛情を抱くことへと、その愛は形をさまざまに変えて多面的に照らしだされている。融和への欲望は、女が女を欲望するひとつのモデルとして理解されるであろう。その欲望はファルス中心主義的な、支配/被支配という性愛的な欲望を繰り返すのではなく、相手を支配しない欲望のモデルを示しているからだ。そしてこの支配/被支配ではない愛情の形から、ひとつの倫理的な関係が浮かび上がってくることになるだろう。

一見したところ、『肖像』におけるドラの欲望の構造は、いわゆるフロイトの前エディプス期的な両性性の理論と一致するようである。ドラは父親と母親の両方に同一化しており、またこの両方の人物を欲望する。だが『肖像』においては、フロイトが女のセクシュアリティを論じるときに用いる、女の「エディプス的去勢」や「ペニス羨望」と言われる概念とは相容れない構造となっている。ドラも、そしてK夫人に関しても、支配や所有という発想はない。ドラとK夫人の間では、ファルス中心主義のエロティシズムの概念から借用してきた欲望は見られない。自分の所有物にできるかどうか为主要な関心であるファルス中心主義的な欲望、または視線による支配といったものはここには存在していない。

ドラの欲望は、K夫人の「微笑み」や真珠のように「白い肌」、軽くかわされるキスのかすかな音、といったイメージによって表現される。

つぶやく、そしてとてもかすかなキスの音。

いい?..... それからその上のここにも。<sup>(13)</sup>

また、ドラの欲望はK夫人の声を聞きたい、という願望にもなっている。<sup>(14)</sup>このようなドラの欲望は「拡散され、増幅する」女のセクシュアリティ<sup>(15)</sup>を示している。ドラにとってのまなざしとは、相手を支配し所有するための手段ではなく、相手に融けこむことを切望するまなざしのことである。

ドラ 私を見て。あなたの目の中に入りたいの。あなたに目を閉じてほしいのよ。<sup>(16)</sup>

シクサーの『肖像』では、まなざしは支配や権力関係とは別の様相であられる。ドラは憧憬のまなざしでK夫人を見つめるが、夫人は振りかえらず、鏡越しに恐ろしく静かで理解できない穏やかな微笑みを浮かべながらドラのことを見つめている。<sup>(17)</sup>

ここで、ドラがドレスデンの画廊でその前に二時間佇んだと『症例』に記されている「システィナの聖母像」<sup>(18)</sup>

の場面を考えてみよう。『肖像』の劇場での演出では、聖母が映像として映しだされた場面である。

突然、おそらく誰にもわからないだろうが、聖母に抱かれている幼子イエスが、他でもない子供のドラであることが明らかになる。

映画のシークエンス、3コマ分の。システイナの聖母と置き換えられた聖母、K夫人。鏡の中には、聖母の後ろにいるドラ。

どちらが（マリア、それともK夫人？）

話しているのかわからない。<sup>(19)</sup>

この場面でドラは、母性的な人物（聖母＝K夫人）に陶醉するのみならず、幼子のイエスを子供の自分と重ねて自身の像にも魅了されている。これは精神分析的な読み方を促すイメージであり、Lacanの言う「鏡像段階」の母子の姿を思わせるものである。この聖母が映しだされた場面は、この「鏡像段階」の両義性をも想起させる<sup>(20)</sup>。ドラはK夫人を聖母のように崇拜するが、同時にそれは分離の不安を吐露することにもなる。<sup>(21)</sup> ドラに欲望させるのは、鏡に映しだされた二重の像である。ドラはK夫人に「キスさせて！」とせがむが、K夫人のほうは微笑みつつも「ぼやけてきて、どこまでも遠く、こんなにも近くにいるのに近寄ることはできず、首や体で拒絶して、ドラが抱きつこうとするのに抵抗する」。<sup>(22)</sup> このK夫人の身振りは、母親が子供を引き離してゆくかのように、穏やかながらもドラに分離を促している身振りである。この聖母＝K夫人への同一化と分離、という身振りは繰り返される。<sup>(23)</sup> ここではもはやK夫人はドラの父と恋愛関係にある具体的人物としてのK夫人ではなくなっている。具体的、個別的な人物からより抽象化された「母」なる存在、聖母の形象として描かれている。

この同一化による全能感と、分離・欠如による不安の両義性は、ラカンの理論においては男の主体形成に関わるものとして理論化されていたものであった。これに対してシクスーはこのラカンの「鏡像段階」理論、フロイトの「前エディプス期」理論を、女の主体形成における「失われていた母との再会」としてとらえ直している。

「声」、「法」よりも以前の歌、息吹が象徴界によって切断され、分離を司る権威者のもと言語にふたたび占有される以前の歌。もっとも深く、もっともいにしへの、そしてすばらしい訪れ。(中略)声——枯渇しない乳。それは再び見いだされた。失われていた母が。永遠なるもの——それは、乳と混ざりあった声なのである。<sup>(24)</sup>

『肖像』のドラはK夫人を通して「母との再会」を果たしたと言える。ドラは自分自身をも聖母に同一化する。<sup>(25)</sup> K夫人＝聖母、ドラ＝聖母というこの同一化の図式は、ドラの親密な愛の対象をK夫人とも聖母ともつかなくさせるものである。ここには分離しつつ融合する「鏡像段階」的な両義性が見てとれる。

#### IV. 母／子の融合関係

『肖像』では、部屋の中を子宮の中、胎内のメタファーに見立てたシーンがある。

カーテンの音。

ついでつぶやくドラの声が遠ざかる。

洞窟の中みたい。あなたはどこ？洞窟の中みたい。わたしよ！わたしのなかのわたし、影のなかの。あなたのなかの。<sup>(26)</sup>

この呼びかけはこの作品の中で最も美しい場面のひとつである。ここでの「わたし」や「あなた」、「わたしたち」はドラやK夫人といった具体的な登場人物たちのことであると同時に、特定の名前を持たない、ある抽象的な次元の人物たちのことでもある。実際、カーテンが引かれる演出により、部屋の中は暗くなる、洞窟の中のようなという設定になっている。ここで登場人物たちは匿名性を帯びる。観客からは視覚的な把握が奪われ、観客は暗闇の中でドラの声だけを聞くことになる。それは私たちがまだ母の胎内にいた頃、また生まれて間もなくうまくものを見ることができなかった頃、聞こえてくる声をたよりに自分とは別の誰かに呼びかけていた頃のこと

を追体験させてくれるものである。他者を包摂しないあり方が「母-子」の融合的な関係という姿となって表現されている。

子供時代（彼女がかつてそうであったし、今もそうである子供、彼女が自分を他者化するまさにその場において、彼女がつくり、つくり直し、解体する子供）に対する関係同様、無上の喜びとしての、また暴力としての《母》に対する関係も断たれることはありません。テキストである私の肉体は、歌うように流れ出すものに貫かれています。私を聞いてください。それはつきまとい、つなぎ止める《母》ではありません。それは、あなたに触れながら、あなたに影響をあたえ、言語活動へ出発するようにと内奥からあなたを励まし、あなたの力を駆り立てる、声に等しいもの。それはあなたに笑いかけるリズム。あらゆるメタファーを可能なもの、望ましいものにする親密な受け取り手。神、魂、あるいは「他者」同様記述できない肉体（肉体というもの？もろもろの肉体？）。あなたの中に入って来るあなたの一部分であり、あなたを膨らませ、あなたを励まして、言語の中にあなたの女としての文体を記述させるもの。女の中には、力を回復させ、糧をあたえ、分離に逆らう母親的なものが、程度の差こそあれいつでもあるのです。それは、切断されるままにならず、かえって規範を息切れさせる力なのです。私たちは女を、その身体のあらゆる形態とあらゆる時期から、再考することでしょう。<sup>(27)</sup>

シクスーのこのマニフェストは、自己-他者関係が対立項としてではなく、「母-子」関係、さらにそこから派生した女-女関係（「女はもうひとりの女に、女をあたえる」<sup>(28)</sup>）をモデルにした関係、あり方を目指したものであると言える。

ガヤトリ・C・スピヴァックは、他者をともなう倫理関係は、独立した個人の普遍化を意味するものであり、「母」が「前-固有的な比喩表現」として、つまり妊娠しており未だ名もない胎児を抱えているものとして単一な全き主体ではない場合、倫理神学的な「我-汝」のための空間は残されていない、と述べている。<sup>(29)</sup> ある特有の存在決定という次元を「母と子の場」という名のもとに前景化している、というのである。「子」とは胎児であり、未だ何の特徴も与えられていない——娘なのか、息子なのか、また「どの」子なのか、他者の比喩表現である。

「母-子」の関係は、倫理的な神学的な「我-汝」関係とは位相が異なるものである。すでに分離させられ、個として存在する、一対一としての「他者」との関係に対し、「母-子」関係では、一方がもう一方を排除せず内包している関係、つまり個として対として存在しているわけではないが、潜在的に「他者」としてそこに「いる」、非対称であり、また確実に「他者」を含んだ融合関係なのである。それは弁証法的に、対立するものが最終的には一者、同一者へと統合、止揚されるような関係ではない。

主体を形成するためには、それが明らかに自分のものではないと否定、排除する過程が存在する、と言われていた。自己が確固たる自己であるためには、またその自己を維持していくためには、自分ではないもの、全き「他者」は否定されなければならない。自己が自己として抛って立つものをつくりださなければならないし、そのつくりだされたものは常に排除されつづけなければならない。これはファルス中心主義と言われてきたものが、女に対して自分が男であることを自己同定し、女に「他者」の役割を割り振ってきたことのアナロジーでもある。それに対しシクスーは、その過程における「他者」の排除、強制的統合ではない他者関係というものを、作品を通して提示している。

女が男にとっての「他者」であることを拒み、「主体=同一者」たることを推奨したのは Beauvoir であったが、男の「同一者」となることに警告を発し、男とは違う女の差異を強調することで他者を問題にしたのがシクスーやイリガライたちであった。一方、シクスーの「母-子」関係、さらにそこから派生した、「女に女を与える」「女-女」関係のモデルは、イリガライの「母-娘」関係のように、あらかじめ母と娘という女同士の世代間にわたる連帯としての形を損なうことなく抱擁しあう関係とは少々異なるものである。

シクスーはこの作品を通して、母を単に前エディプス期の母との再会から女のセクシュアリティを解放するというだけでなく、「母-子」の融合関係、もしくは「女-女」関係という、「個」だけを存在とみなす見方からだけでは名づけられない概念、したがって間主観性とも異なる概念としてこの倫理関係のモデルを提示している。この『肖像』という作品におけるドラとK夫人の関係は、単なる「鏡像段階」における幸福な双数関係、二者間に閉じられた「想像界」的關係から、「母-子」の関係、「女にもうひとりの女を与える」関係の比喩表現と

して開かれていったと言える。シクスーがエッセイで述べる「他者が私の中に入ったり、横切ったり、とどまったりする」<sup>(30)</sup>という空間が、子宮の中の胎児としてのドラの語りによって具体化されている。

遠くからの、ドラの声。

ドラ 時にはいっぱいまで満ちていて、時には空っぽで、そしていつも薄暗い。私たちはすべてを理解できるかも知れない。そして世界を変えることができるかも知れない。この時間は、ためらいがちな目のように開いたり閉じたりする。私が知っていることを、誰にも言わないでね。誓って。

K夫人 約束するわ。<sup>(31)</sup>

こうして「母を愛する娘」であるドラは、前エディプス期の母と再会し、「母-子」の融合関係という倫理的モデルを提示するに至ったのである。

## 結論

フロイトの『症例』とシクスーの『肖像』をあわせ読むことにより、フロイトが見逃したドラとドラの母親との関係、ドラとK夫人との関係には、フロイトの言う単なる「父を愛する娘」の母親憎悪や異性愛的な「リビドーの代理」としての「同性愛的」恋慕といった関係とは別の、親密な女同士の間柄があるということがわかった。それは「母-子」関係という融合的な関係であり、その親密な関係性は、ひとつの倫理的モデルを提示していると言えるだろう。

## 註

- (1) ジグムント・フロイト『フロイト著作集 5』（懸田克躬・高橋義孝他訳 人文書院 1969年）所収。以下、『症例』と略記。
- (2) Hélène Cixous, *Portrait de Dora de Hélène Cixous*, dans *Théâtre*, éditions des femmes, 1986. 以下、『肖像』あるいは *Portrait* と略記。本論では原文引用に際し、『ドラの肖像 —— エレーヌ・シクスー戯曲集』（松本伊瑳子、如月小春訳 新水社 2001年）の日本語訳をほぼ踏襲しているが、不足していると思われる箇所については一部独断で変更、訳出させていただいた。
- (3) Jeanette Laillou Savona, "In Search of a Feminist Theater: *Portrait de Dora*", *Feminine Focus: The New Women Playwrights*, Oxford University Press, 1989.  
————— «Portrait de Dora d'Hélène Cixous: A la recherche d'un théâtre féministe» dans *Hélène Cixous, chemin d'une écriture*, Rodopi et St-Denis, Presses Universitaires de Vincennes, 1990.  
Gayatri Chakravorty Spivak, «Cixous sans frontière» *Du féminin* (Textes réunis par Mireille Calle), collection TRAIT D'UNION les éditions Le Griffon d'argile, 1992.  
————— "Cixous without borders" *Of the feminine* (Translated by Catherine McGann), Humanities Press New Jersey, 1993.
- (4) Luce Irigaray *Ce sexe qui n'en est pas un*, édition de minuit, 1977, p.45.
- (5) 『症例』 pp. 285-286.
- (6) *Ibid.*, p. 305.
- (7) *Ibid.*, p. 324.
- (8) *Ibid.*, p. 318. 『肖像』 p. 32, p. 39.
- (9) 『症例』 pp. 316-317.
- (10) *Ibid.*, p. 312.
- (11) *Ibid.*, p. 317.
- (12) *Ibid.*, p. 318.
- (13) 『肖像』 p. 39.
- (14) *Ibid.*, p. 37, p. 40.
- (15) Hélène Cixous, *La Jeune Née* (en collaboration avec Catherine Clément), Union Générale d'Édition, collection 10/18, 1975, p. 163.
- (16) 『肖像』 p. 38.

- (17) *Ibid.*, p. 34, p. 38.
- (18) 『症例』 pp.345-346. この「システイナの聖母像」とはドレスデン国立絵画館所蔵のラファエロ作「システイナの聖母」であると思われるが、詳細は不明。
- (19) *Ibid.*, p. 36.
- (20) このような見解は以下の論文に示されている。Sharon Willis «Hélène Cixous's *Portrait de Dora*: The Unseen and the Un-scene », *Theater Journal*, vol.37, n° 3, oct. 1985, pp. 295-296.
- 「鏡像段階」とは、身体の発達が未成熟で自分の思うままに身体を動かさないでいる、つまり自分の身体がばらばらに機能していると感じている幼児が鏡に映る自分の姿を見て、統一された身体というものを視覚によって先取りする段階のことである。いずれ身体機能が統一されるのを目で見ることで先に知るのである。鏡に映されるまでは自己と他者との境界が曖昧で、乳児は母と自分との違いを区別していない。母との融合状態に置かれ、まだ自己と他者の分離を経験していないため、乳児は自己の全能感に浸ることができる。これが分離されるのは、自分の視覚に強いらられるためである。「鏡像段階」ではこの母との融合と分離の両方が存在する。
- (21) 『肖像』 p. 34, pp. 42-43.
- (22) *Ibid.*, p. 36.
- (23) *Ibid.*, pp. 75-76.
- (24) *La Jeune Née*, pp. 172-173.
- (25) 『肖像』 p. 92.
- (26) *Ibid.*, p. 41.
- (27) Hélène Cixous, «Le Rire de la Méduse » *L'Arc*, n° 61, 1975, p. 44. 原文引用に際し、「メデューサの笑い」『メデューサの笑い』（松本伊瑳子、国領苑子、藤倉恵子編訳 紀伊国屋書店 1993年）の日本語訳を踏襲し、不足していると思われる箇所については一部独断で変更、訳出させていただいた。
- (28) *Ibid.*, p. 44.
- (29) Spivak, "Cixous without borders", pp. 49-52.
- (30) *La Jeune Née*, p. 158.
- (31) 『肖像』 p. 41.

(2006年12月1日受理)